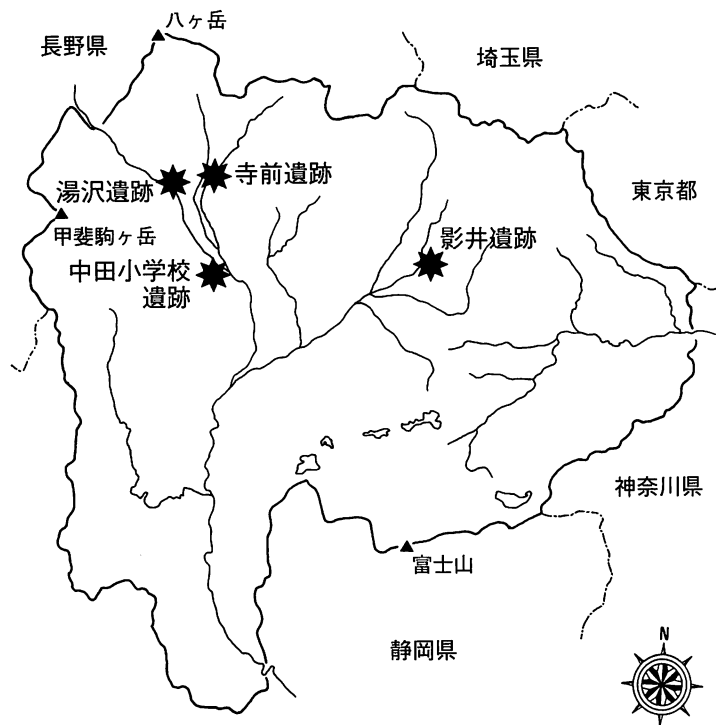


第2節 影井遺跡出土の「鈴」について



第100図 鈴出土分布

ったのか考えていきたい。

第2項 出土事例

県内では、韮崎市中田小学校遺跡から金銅製の鈴1点と鉄製の鈴1点、高根町湯沢遺跡からは金銅製の鈴1点、また、2000年には明野村寺前遺跡において鉄製の鈴が出土と現在計5点の出土をみる。

現在の出土状況からみると、平安時代のものではあるが、时期的にはばらつきがみられる。また、現時点においては峡北地域に集中して分布する傾向が伺える。(第100図参照)

次に県内、各遺跡出土の鈴について述べる。(第101図参照)

塩山バイパス関連影井遺跡 塩山バイパス関連影井遺跡3号住居出土の鉄製の鈴は、直径4.3cmの円形で、中央部で上下の半球を接合し、上部に小環が取り付けられ、下部にはスリットが入っている。内部には鉄製の丸1.0cmが入っている。重さ52.83g。振ると錆のためか、カラカラと低く鈍い音がした。この鈴は、同住居出土の土器から、11世紀末から12世紀初頭と考えられる。

高根町湯沢遺跡 (註1) 高根町湯沢遺跡6号住居出土の金銅製の鈴は直径4cmの円形で、上下の半球を中央で接合、上部には環を取り付けてあった形跡があり、また下部にはスリットが入っている。8世紀末から9世紀前半と考えられている。

韮崎市中田小学校遺跡 (註1・2) 韮崎市中田小学校遺跡13号住居出土の鈴は2点あり、金銅製の鈴は直径2.4cmの円筒形に近い球形を呈し、中央部で上下の半球を接合、上部に小環が取り付けられており、下部にはスリットが入っている。内部には鉄製の丸0.9cmが入っている。また、鉄製の鈴は直径2cmの球体で、上下の半球を中央部で接合し、上部には小環が取り付けられ、下部にはスリットが入っている。平安時代末と考えられている。

明野村寺前遺跡 (註3) 明野村寺前遺跡では、重複した平安時代の住居跡中から、鉄製の鈴が出土した。また、付近からは「か帯」が出土している。

第1項 はじめに

1999年、塩山バイパス関連影井遺跡3号住居において、鉄製の鈴が出土した。

3号住居は、残念なことに調査区内からは全貌を伺うことができなかった。住居は、床面の中央に竈を配し、次の時代の囲炉裏を連想させる。その竈内から、鉄製の鈴が出土した。

住居の生活面は極めて浅い状況で検出され、その土を掘り下げ、床面の下から、埋められるようにして鈴が出土した。鈴の他、竈からは皿、鉢、甕、灰釉陶器等が出土している。また、1号住居が隣接し、出土遺物等からはほぼ同時期の住居と考えられる。以上のことから影井遺跡3号住居の「鈴」についてみていきたい。

また、県内出土の鈴は極めて少ないが、その出土事例を確認した上で、平安時代において、「鈴」にはどのような性格があ

出土の「鈴」は、2 cmから4 cmのものと大きさ、材質も一定ではないが、製作技法は、半球を重ね合わせたもので、上部には小環を取り付け、下部にはスリットを入れる、現在の鈴と類似点がみられる。(第101図参照(註4)) 現在出土の鈴は、すべてにおいて小環に対し、スリットが逆方向に入っているのが共通点として上げられる。現代の鈴では、小環と平行にスリットが入られるものも見られる為、この製作技法が、音に関するものなのか、規則的なものなのかまたは、得に意味をなさないものなのか現時点では不明である。丸の大きさについては、鈴本体の球形に対し大小関わりはないようである。

県内では、金属製の鈴は、現在、馬具として考えられており、馬の生産地域と結びつく一つの要素となっている。

以上の事柄をふまえ次に、鈴の使用方法について考えて行きたい。

第3項 使用方法

影井遺跡等で出土した金属の鈴は古くは古墳時代から現われる。(註5)

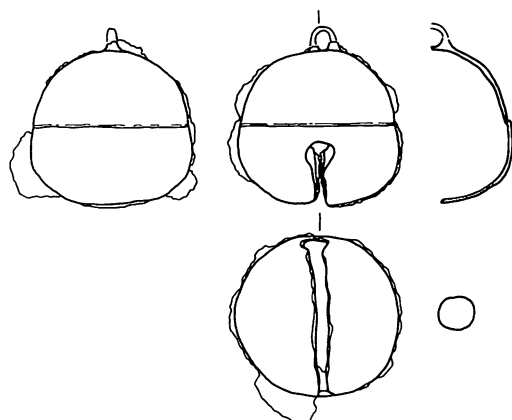
用途は装身具・楽器・鈴鏡・馬具等多様である。

古墳から出土した副葬品の中に馬具とともに、鈴が出土。また馬形埴輪のなかには装飾品として鈴が付けられているものもあることなどから馬鈴として考えられている。

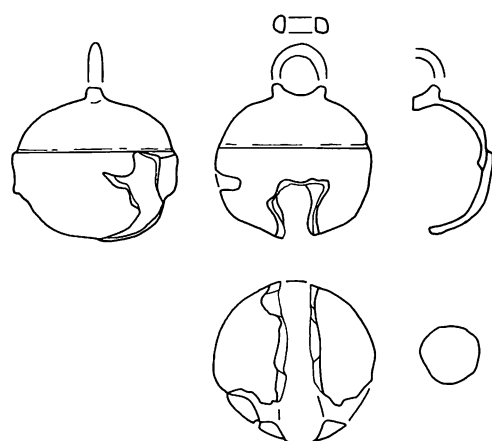
また、時代は下って『梁塵秘抄』(註6)の神歌(三二四)に「鈴はさや振る藤太巫女 目より上にぞ鈴は振る ゆらゆらと振り上げて 目より下にて鈴振れば 懈怠^{けたい}なりとて ゆゆし 神腹立ちたまう」(訳 鈴をそのように振ってもよいものか、藤太巫女よ。鈴は目より上の高さで振るもの。ゆらゆらと振り上げて。目の高さより下で振るようなことをすれば「怠けている」と神がお腹立ちになるぞ。恐ろしいことだ。)とあり、巫女神楽の時に使用する神楽鈴として鈴が使用されたことがわかる。また、「ゆらゆら」は多く束ねた鈴が触れあって鳴る音を表現していることから、神楽鈴は複数の鈴を束ねた楽器であったことがわかる。鈴は魔よけ、悪霊を払うという呪術的装身具としての要素があったことが伺える。

また、能楽の演目である『翁』では「三番叟^{さんぼうそう}」が鈴を鳴らしながら舞う。『翁』は儀式性の濃い祝禱^{しゅくとう}の舞で、祝賀会やお正月に公演される。また、鈴は「種まき」を意味し、五穀豊穡^{ごこくほうじよく}を祈る。ここで使用する鈴は、複数の鈴を束ねたもの鳴らす。

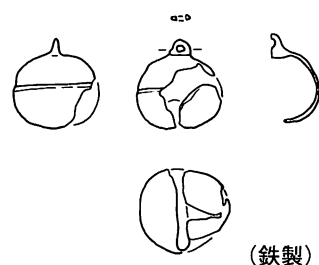
その他の用途として鈴は「熊除け」としても使用されている。



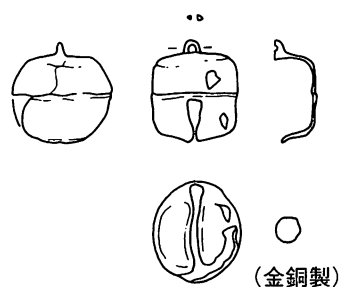
影井遺跡



湯沢遺跡

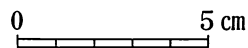


(鉄製)

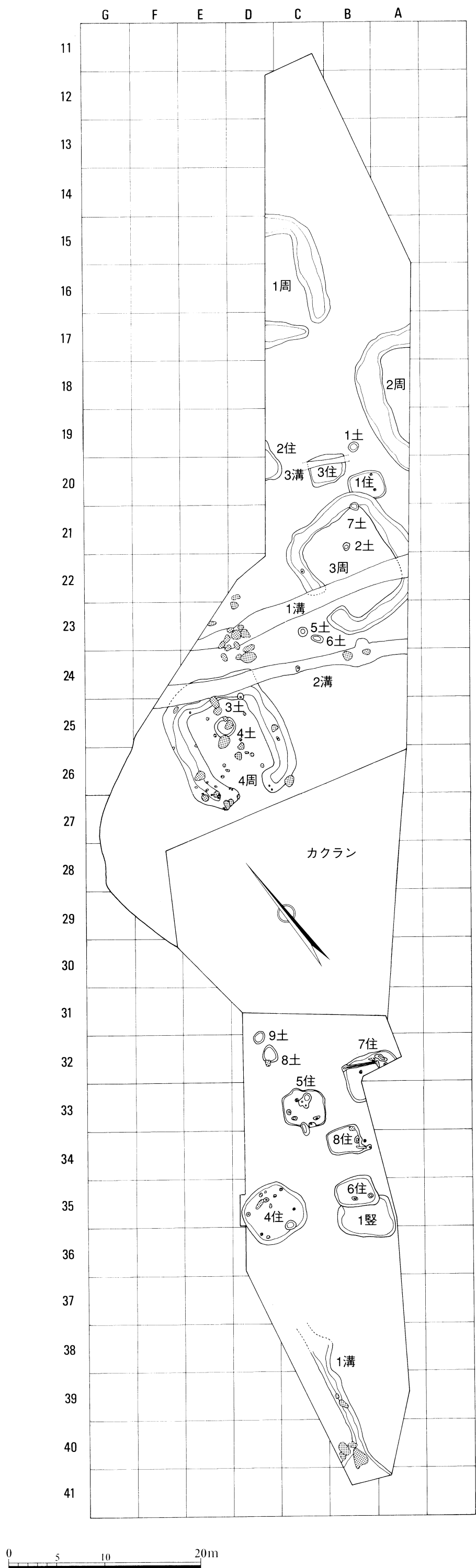


(金銅製)

中田小学校遺跡



第101図 県内出土の鈴



付図 下西畑遺跡全体図

第4項 おわりに

文献資料、現在残っている民俗事例などから、鈴の使用方法について述べた。次に、影井遺跡3号住居から出土の鉄製の鈴について考えたい。

影井遺跡の鈴の場合、住居の床面下から出土していることから、日常に使っていたとは考えにくい。楽器としての鈴、馬具等ではなかったと考える。

また、県内の平安遺跡からの出土が少ないことから、広く一般に普及していたとも考えにくい。

以上の事から、鈴は何か特別な意味をもって、埋められていたと考える。しかし、鈴の出土例が少ないことから、使用方法に色々な可能性を残していると考えている。

合わせて、使用方法について鈴の大きさが一定ではないことから、鈴を単一で使用していたものと、巫女神楽の楽器のように、複数で一つとして使用していたものと使用方法には違いがあり、また音色も変わってくるのではないかと考える。

今後の資料の増加を期待したい。

(註1) 末木 健 「牧と馬」『山梨県史 資料編2 原始・古代2』山梨県 1999

(註2) 山下孝司 「中田小学校遺跡」『山梨県史 資料編1 原始・古代1』山梨県 1998

(註3) 川道 享 「寺前遺跡」『2000年度下半期遺跡調査発表要旨』山梨県考古学協会 2001

(註4) 第101図の湯沢遺跡、中田小学校遺跡の鈴は『山梨県史』から、また影井遺跡の鈴は報告書第81図49より筆者が再トレースを行った。

(註5) 鈴には、土製のものと金属製のものがあり、古くは縄文時代の土鈴が上げられる。(山梨県釈迦堂遺等) その構造は、半球状の粘土を二つ合わせ、内部には小さな粘土の玉を1～10個を入れている。本稿では、金属製の鈴についてのみ、述べることにした。しかし、構造や用途には共通した面があると考ええる。

(註6) 1179年成立とされているが不詳。後白河法皇撰。平安末期の雑芸の歌を分類集成したもの。

参考文献

『角川日本史辞典』 株式会社角川書店 1966

「梁塵秘抄」『日本古典文学全集 25 神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』 株式会社小学館 1976

『能・狂言事典』 株式会社平凡社 1976

『国史大辞典 第2巻 う～お』 株式会社吉川弘文館 1980

坂本美夫 『馬具』 ニューサイエンス社 1985

『平安時代史辞典 上』 株式会社角川書店 1994

『狂言ハンドブック』 株式会社三省堂 1995

『日本民具辞典』 株式会社ぎょうせい 1997

『日本民俗大辞典〈上〉』 株式会社吉川弘文館 1999

末木 健 「山梨の牧関連資料」『古代の牧と考古学』 山梨県考古学協会 2000